

『サハリン島』  
エドゥアルド・ヴェルキン(著)、北川和美・毛利公美(訳)

河出書房新社  
2020.12

淡々とした語り口に支えられた異常な世界の描写

『ゴールデンカムイ』とチャーホフの『サハリン島』を現代風にした SF 小説かと思って読むなら、いくぶんかは当たっているが、そんな読者の想像をさらに超えたところまでないところまで連れていってくれる。

最近ピウスツキ関連の書籍が続けて出たこともあり、サハリンへの関心が高まっていると思われる中、監獄と凶悪な脱獄囚。海と山と森、野生の熊、移民の集団と虐げられる先住民族というおなじみ(?)のサハリン・樺太の風景が、ゾンビ、放射能汚染、人間(とりわけ中国人)の死体を原料にした究極のリサイクル産業、民衆の不満のガス抜きとして実施される人種差別的な「ニグロぶちのめし」(ただし白人もニグロに分類される)など、想像力のドーピングとでもいうような過剰な SF のアイデアで埋め尽くされるのだ。

実は今年の2月、日本語訳の刊行にあわせたオンラインのイベントに著者のヴェルキン氏と翻訳者の北川和美氏・毛利公美氏を招いて講演していただく機会があった。とんでもない小説のインパクトとは裏腹に、たいへん知的で穏やかな人柄の方である。芥川や三島から、小松左京のような SF 作家や特撮映画まで、日本の文化にお詳しいのだが、ロシアの知識人としてはそれほど並外れてはいない。多くのロシア人が抱く、少し理想化されたきらいのある日本のイメージを煮詰めて蒸留すると、こんな

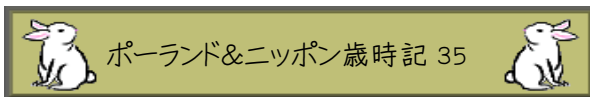
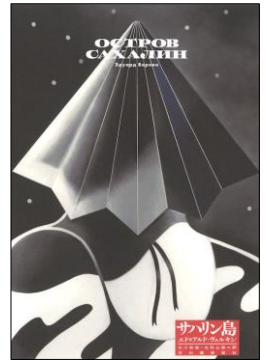
怪物ができあがるということだろうか。これまで主に児童文学やヤングアダルト小説を書いており、大人向けの作品はこれが初めてなのだそうだ。

主人公は日本人とロシア人の親を持つ女性だが、聴衆からの感想のひとつで、一人称の語り手の性別が、しばらく読み進めるまで分からなかったというものがあつた。確かにそうなのだが、アクション場面の多い小説なのでヒロインが男性的あるいは中性的に描かれるという訳でもない。翻訳の文体のせいもあるかもしれない(ロシア語原文は女性形があるのですぐに性別が分かる)。しかしどうも作者は主人公の性別を小説のプロットにとってもそれほど大きな意味をもつものとは考えていない節がある。

そういえばチャーホフの『サハリン島』も、語り手の性別が特に読者に訴えるものはない。同じタイトルでも全く異なる印象を与える二つの作品だが、記録文学的に淡々としながら、好奇心旺盛なところもあるという語り口と視点が、異常な世界の描写を支えているところは共通しているのかもしれない。

最後になって申し訳ないが、サハリンが舞台とはいえ、ポーランド人は登場しない。

(越野 剛、慶應義塾大学准教授、本会会員)



エラン・ヴィタール

私の子供のころの思い出の一つは、田舎に住むお祖母ちゃんの薔薇の庭で遊んだことです。その影響か、私たちもベランダに薔薇を一株植えました。ピンク色の薔薇で、花言葉はポーランド語で「友情」です。初めての冬、暖かくなりかけた2月の末に、薔薇を包んだ藁囲いから新鮮な葉が一枚顔を出したのです。

ciepły dzień pierwszy	もう温し
znad chochoła wyrasta	藁囲いから
świeży liść róży	ばら若葉

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

ogród za domem	裏庭の
w zieleni kos ukryty	茂みか 歌鳥
wita poranek	朝を告ぐ

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

曲水や赤禪の一茶あて  
京よりの妣の持参の雛の軸  
OH! 出たか野辺のごちそうフキノトウ  
(妣(はは) || 亡き母)

岩見沢市、霜田千代磨